

第2回奥越地区魅力ある県立高校づくり検討会議 議事録

□日時 平成21年11月18日(水) 9:00~11:00
□会場 勝山市教育会館 3階 第1研修室
□出席者 委員：小野田委員、木戸口委員、阪井委員、高田委員、但川委員、塚田委員、中川英之座長、中川眞委員、西川委員、橋詰委員、平沢委員、藤井委員、山田委員、吉田委員、渡辺委員、中谷企画幹
(16名、五十音順)
オブザーバー：福井県教育委員会 稲山委員
□事務局 広部教育長、東村教育政策課長、小寺学校教育振興課長、小和田高校教育課長

○開 会

教育政策課長 それでは、ただ今から、第2回目の「奥越地区魅力ある県立高校づくり検討会議」を開催いたします。皆様方には、お忙しい中、会議に御出席いただき、誠にありがとうございます。
開会に当たりまして、広部教育長から御挨拶を申し上げます。

○教育長あいさつ

広部教育長 おはようございます。今日は大変お忙しいところ御出席いただきまして、誠にありがとうございます。
今日は2回目ということで、勝山市で開催させていただきました。8月に第1回目の会議を開催しましたが、その際には、皆様方からいろんな御意見、御提言がございました。私どももその後、いろいろ調整をしまして、高等学校ごとに、関係する各界各層の皆さん、特にPTA、OBの皆様方にもいろいろ御相談し、協議を重ねてまいりました。
また、このブロック以外にも、福井・坂井ブロックの旧坂井郡ブロック、それから嶺南の若狭地区において同様な会合を持たせていただき、いろんな御意見等を伺いました。これから他の地区におきましても再編整備を進めていくわけですが、この奥越地区が先行しており、皆さん注視していらっしゃる。
この奥越地区の再編整備を素晴らしいものに仕上げ、県下のモデルにしていきたいという強い思いが、私どもをはじめ教育界全体にございます。
また、私どもも、これから来年度の予算要求に向けて、県庁ぐるみで議論していく必要がございますので、どうか忌憚のない御意見等をお寄せいただきまして、実り多いものになりますようよろしくお願いしたいと思います。

○委員紹介

教育政策課長 それでは、本日初めて御出席いただきました委員を御紹介いたします。
ベネッセコーポレーション教育研究開発センター特別顧問の高田委員です。
元大野市教育長で高問協委員の藤井委員です。
なお、本日、県の学校教育担当企画幹の松田委員が公務で欠席のため、県教育庁企画幹の中谷が代理で出席させていただいております。

○議 事

教育政策課長 それでは、議事に移ります前に、資料を御確認ください。次第、配席図、出席者名簿、資料1「各専門部会の報告書」、資料2「再編整備にかかる検討課題と

対応方針」、資料3「第1回会議議事録」がお手元にあると思います。その他に、勝山高校の検討部会資料、「総合選択制の例」という資料がございます。

それでは、中川座長に議事進行をお願いいたします。

中川座長

それでは、早速議事に入ります。8月の第1回の会議以降、各高校の専門部会において、課題や魅力向上策などについて検討を行っていただきました。本会議では、今後、専門部会の検討結果を踏まえ、奥越地区の県立高校の魅力ある在り方について県教育委員会に対して報告を行うことにしております。今日は、専門部会の検討結果や委員の皆様方からの御意見を集約しまして、本検討会議としての報告のとりまとめに向けた協議を行いたいと思います。

それでは、各部会長から検討結果についての報告をお願いします。まず、大野高校からお願いします。

◆専門部会検討結果報告

西川委員

大野高校検討部会の検討結果について、簡単に御報告申し上げます。

大野高校の検討部会は、10月14日の午後2時から4時まで、本校の応接室で開催いたしました。出席者は、地域代表、保護者代表の4人の方々を含む10人で行いました。

検討部会では、学校側から、全日制ならびに定時制課程の現状と今後の在り方について説明申し上げます。全日制課程につきましては、生徒の学力向上と進路実現に向けた様々な取り組みや進学実績、あるいは部活動、地域に開かれた学校づくりへの取り組みにつきまして委員の皆様にご説明いたしました。

また、魅力ある学校づくりの方向性として、現在本校の改革検討プロジェクト委員会で協議中の改革案について報告いたしました。4年制大学、短期大学、専修学校、就職と様々な進路希望を持つ生徒が入学してくること、最近では8割を超える生徒が国公立大学への進学を希望して本校に入学してくることから、進学クラスを2クラス、特別進学クラスを3クラスとして、生徒の学力に応じて学ぶことが可能な習熟度別クラス編成を考えていることを説明いたしました。

定時制課程につきましては、平成22年度からの定時制・通信制課程の見直しに当たって、本校では昼間一部の単位制とすること、2学期制に移行し3年で卒業が可能なカリキュラムを編成することなどを説明いたしました。

主に地域代表や保護者代表の委員の方々から、全日制ならびに定時制教育の在り方や大野高校の将来の在り方等について、いろいろな御意見や御提案を頂戴いたしました。お手元の資料は、主な意見という形で、私なりにまとめさせていただいたものです。

まず、大野高校の現状と課題について話し合われました。経済的な負担や部活動のことを考えると、大野の子は大野高校で学んでほしいという意見が多数ございました。就職などを考えるコースを作れないかとの指摘がありましたが、最近では就職を希望する生徒が大変少なくなっていることを説明し、御理解をいただきました。様々な学力の生徒が存在するのだから、改革案は難しいことを学びたい子と基礎・基本を身に付けたい子のどちらにも良いのではないかと、というような賛成の意見で締めくくることができました。

次に、奥越地区の再編整備についても御意見をいただきました。大野高校のクラス数は6クラスのまま、という御意見がございました。中学卒業生数の減少を考えると、平成23年度からではなく、平成22年度からでも5クラスになるかもしれない状況であることが話し合われました。実際、10月21日に募集定員が発表されたわけですが、大野高校は20人定員が減りまして、来年度は193人の5クラスで募集するということになりました。

次に、定時制課程の見直しについてですが、大野高校の定時制に魅力を感じる、よく頑張っているということで、特に見直しについて不都合があるなどの御意見はございませんでした。

今回の大野高校検討部会は、地域の皆様や、保護者、同窓生の皆様から、大野高校の現状について、あるいは今後について、いろいろと貴重な御意見をいただく良い機会になったと思います。奥越地区の中核的な進学校として責任を果たし、地域社会や同窓生の期待に応えられるよう、そして、できれば福井地区の高校に流れていく中学生に、なんとか少しでも大野高校に来ていただけるよう、今後も魅力ある学校づくりになお一層取り組んでいかなければならないと思っております。以上で報告を終わります。

中川委員

勝山高校検討部会の報告をさせていただきます。平成21年10月23日、10時から12時、勝山高校の応接室において行いました。出席者は10名でございます。内容は大きく分けると、勝山高校の現状説明と協議の2点でございます。

現状説明でございますけれども、まず、進学のこと、学力向上のことについて説明いたしました。進学実績や、実績を上げるための取組内容の一部、高校生学力向上推進事業などについて説明させていただきました。それから部活動ですが、運動部、文化部の実績について説明いたしました。

また、魅力ある学校づくりということで、「勝山高校つうしん」を年5回発行して、関係機関に配付させていただいております。さらに、中学校の進学説明会や見学会、PTAの各委員会や学校関係者評価の実施などについて説明させていただきました。

次に、情報コースについてでございます。これは、本年3月末に「県立高校再編整備計画」が策定されまして、その中の「情報化社会に主体的に対応できる人材の育成を図るため、普通科に高度な情報科学学習を行い理工系・情報系大学への進学を目指す情報コースを設置する」ということ、また「普通科5クラス、各36人のうち、情報コースは1クラス36人とする」という方針に基づきまして、本校ではビジョン委員会を作り、延べ17回の会議を開きまして、どのようにして情報コースを勝山高校に取り込んでいくか、設置していくかということを検討してきたわけでございます。

その過程におきまして、教育委員会とも具体的なことを何回か相談をいたしました。そうした中で、「情報コースは現在勝山高校で実施されている2年次からの文理Ⅰや文理Ⅱと同じタイプのひとつと考えていく」、それから「2年次から情報の専門科目の授業を始め、必修の情報A2単位とは別に、2・3年生の2年間で4～6単位を実施すればよい」という県教委からの回答を得ました。

これを踏まえて、進学クラス、特進クラスの配置を検討しました。本校は1組2組が文理Ⅱ、3組が文系、4組が理系、5組が文理Ⅰというタイプになっており、4組の理系コースを情報コースにするというようなことまでは検討しました。

9月に入りましてから、もう一度、情報コースを取り入れることによるメリット・デメリットなどについてシミュレーションをいたしました。その後、10月23日の勝山高校検討部会を迎えたわけでございます。

勝山高校検討部会報告の資料を御覧いただきたいと思っております。部会では、情報コースというのは就職用なのか進学用なのかということから話し合いが始まりました。けれども、前提が進学ということでございましたから、当然進学用の情報コースであるという御理解をいただきました。しかし、そうすると就職する生徒はどこに行ったらいいのか、というような話になりました。これについては、奥越をひとつの地域と考えて、総合産業高校というのができるわけですから、最初から就職を目指すという生徒は総合産業高校を目指していただくことになる

ということで御理解をいただきました。

また、勝山高校が進学校であるならば、「情報」という言葉の響きは就職というイメージがしてしまう、また、情報コースでは、専門の科目を2年と3年で合計4単位やらなければいけないが、情報は進学に必要な科目ではないため、進学という点では不利になってきてしまうので、情報コースはやめて、代わりに理数系のコースを設けたらどうかという話になったわけでございます。ただし、その理数系のコースにおいては情報の学習もやっていく、そういうコースにしたらどうかというような話になりまして、多数の賛成意見をいただきました。

部会の結論でございますが、情報コースを理数コース（仮称）に変更して、それにふさわしい位置付けや、カリキュラムを作成することとし、学習活動に情報の内容も取り入れることとする。ただし、1年次は特別なコース設定は行わず、2年次からコース分けをするということで一致したわけです。以上です。

渡辺委員

新高校検討部会の検討結果を報告します。部会は、資料にあるように3回行われました。場所は、大野東高校応接室です。出席者は資料のとおりです。

内容につきましては、学科編成、カリキュラム、総合選択制の3つがありまして、それぞれいろんな具体的意見が出ましたので、申し上げます。

まず学科編成について、

①5クラスと設定されているが、はじめからクラス数を限定しないで、奥越全体で何の学科が必要なのか考えてから設定できないか。さらに中学生や保護者が行きたい学校、入って良かったと思える学校にしたい。

②既存の学科にこだわることなく、県のモデルとなる新高校にふさわしい学科を考える、また奥越の地区の特性等を考慮し、例えば農業関係のコースを考えても良いのではないか。

③奥越には多くの建設業関係者がおり、建設の仕事も多い。こうした地域性を考えるのならば建設科をなくすのはおかしいのではないか。基幹産業を支える若者の育成を望みたい。何らかの形で建設を残せないか。クラス数の問題があるならば、例えば機械科に建設コースを残せないか。

④工業という大枠で募集し、入学後に、電気・機械・土木といったコースに分けてはどうかという意見もあったが、全国に先例のある総合学科はそうした考え方に基づいているがうまくいっていないのが現状であり、専門性を軸とすべきだという意見が多かった。

⑤情報学科の中に商業系と工業系のものをコースとして設定出来ないかという意見もあったが、学科の特性上、無理という結論になった。ただし、「情報」というネーミングが中学生・保護者を惹きつけている。生徒が希望しない学科ではどうしようもない。「情報ビジネス」など、ネーミングを考えた方が良いという意見が多かった。

⑥奥越の生徒数が減少を続けるのは事実であり、平成23年度には15クラス分と想定される。これ以上クラス数を増やすと、いずれかの学校の定員が埋まらないという事態が起こる。

⑦福井への生徒流出に関しては、高校無償化の流れで変化するのではないか。

⑧建設を残し、家庭と福祉を1クラスにという意見もあったが、仮に建設科を残し、商業科等を残さず、工業系の学科ばかり設定すると、奥越の女子の行き場がなくなるという意見が多かった。

こうした8つの意見が出ましたが、最終的な話し合いの結果を申し上げます。まず、学科編成については原案どおりとする。さらに、建設コースを残してほしいという意見がありましたので、総合選択制の中で建設関係の科目を履修可能とする。総合選択制については最後に説明します。

次にカリキュラムについての意見を申し上げます。

食文化コースについて、調理師を目指す学科から被服を取り入れる学科への変化は、勝山南高校の生徒の動向と一致している。勝山は繊維産業が盛んであることや、勝山南高校に被服を取り入れることで定員が満たせるようになった経緯から考えれば妥当である。

こうしたことから、食文化コースについては、調理師養成課程は設置せず、被服や保育なども含め、生徒の興味・関心に応じた科目を履修できるコースとするという結論に至りました。

最後に「総合選択制」についての意見を申し上げます。

①総合産業高校のメリットは、例えば電気科にいても福祉の学習が出来ることである。

②総合選択の中に「建設」の「測量」という科目を設定して全科から選択できるようにすることで、建設を学びたい生徒、学ばせたい保護者の要望に応える。

総合選択制についての資料を御覧ください。総合産業高校の目玉のひとつである、総合選択制の例が書いてあります。総合産業高校はいろんな大学科が集まっている。今の原案では、商業、工業、家庭、福祉が集まっている。一番上に書いてあるのは学科名です。下には選択科目が書いてあります。例えば、機械科を御覧ください。自学科選択と書いてありますが、これは自分の学科の科目選択をして専門性を高めます。機械科であれば機械工作を選択する。それから他学科の選択の中には、建設というのを入れています。このように、建設から福祉までの科目を選択できることとなります。一番下に書いてあるのは普通教科選択です。これは、進学する生徒には普通科の科目を選択してもらえということ。同時に14講座を開講し、学科の枠を超えた選択授業が行われます。これが総合産業高校のひとつの目玉だと思っております。以上です。

◆再編整備にかかる検討課題と対応方針

中川座長

どうもありがとうございました。3つの部会からの報告を受けました。

それでは、続きまして、専門部会の報告や第1回会議での意見に対する県教育委員会の考え方について、事務局の方から説明をお願いします。

教育政策課長

それでは資料2を御覧ください。県教育委員会の考え方と言いますか、第1回目の会議、あるいはそれ以前から実施計画について浮き彫りとなっていた4つの課題につきまして整理をさせていただきました。既に各専門部会の報告の中に盛り込まれているものもあり、若干重複するかもしれませんが、御説明したいと思っております。

まず、「大野東高校の情報・建設科建設コースについて」でございます。対応方針の欄を御覧ください。大野東高校の情報・建設科建設コースは、生徒数の減少に伴い小規模化が進んでおります。また、卒業生の進路をみても、直近3年間で学科と関連のある業種に就職した生徒数は、毎年2～3人であるということで、今後もコースとして存続させることが困難であろうという考え方が出てまいりました。しかし、建設業は奥越地区の主要産業であること、あるいは土木関連の学習機会を確保したいというような観点から、今しがた御説明がありましたとおり、新高校の工業科において、一定の土木関連の科目について、学科の枠を超えた選択授業という形で取り入れるということで、カリキュラム編成において配慮してまいりたいという対応方針が示されたところでございます。皆さんの御意見を伺いたいと思っております。

検討課題2「新高校における生活福祉科の在り方について」でございます。これにつきましても、大野東高校の校長先生から御報告があったとおりでございます。

すが、調理師養成課程を設置することにより、国家資格を取得できるメリットはあるものの、資格取得のために相当の時間数を取らなければならない、他の分野の学習を行う余裕が少なくなるデメリットが生じること、家庭学科については、食や被服等の様々な内容を取り入れることで、教育効果が高まっていくものと考えられることから、今回の専門部会での検討結果も踏まえまして、調理師養成課程は設置せず、生徒の多様な学習ニーズに対応するため、興味・関心に応じた専門科目を選択できる体制を整備したいということでございます。

検討課題3「勝山高校情報コースの在り方について」でございますが、これも勝山高校の校長先生から御説明がありましたとおり、再編整備計画の中では、勝山高校の普通科に、高度な情報科学学習を行い理工系・情報系大学への進学を目指す「情報コース」を設置するということとしておりましたが、今回の専門部会の検討結果を踏まえまして、生徒募集に当たって特別なコース設定は行わず、2年次からの類型分けにおきまして、生徒の進路志望状況等に応じたコース設定を検討するということとございました。

検討課題4「奥越地区の県立高校の募集定員の在り方について」でございます。これは第1回目の会議の中でも随分御議論がありました。平成22年度の募集定員が発表されておりますので、今一度それを申し上げます。大野高校は、昨年から20名減で193人の募集で、5クラスとなります。勝山高校は7人の増で152人、4クラスの募集でございます。大野東高校は変わらず121人、4クラスの募集です。勝山南高校、これも変わらず90人、3クラスの募集です。このように、既に大野高校では1クラス減という状況が現出しております。再編整備計画におきましては、再編後の各校の1学年当たりの規模について、3校とも5学級としております。これが、高間協の答申の中で一番大きな柱でありまして、教育効果向上を図る上で、各学校においてやはり5クラスは維持し、適正規模を確保したいということが述べられております。

また併せまして、今回の再編により勝山市内の高校が1校減ということ、地元の生徒の通学等についても考慮した結果であります。各学校の定員数については、これまでも中学校卒業生数の推移見込みや進路志望状況等を踏まえて決定しております。今後の定員数の決定に当たっても、こうしたことを十分考慮していきたいと思っております。

以上、検討課題として浮き彫りとなっておりました4点について、対応方針案を御説明いたしました。

◆意見交換

中川座長

どうもありがとうございました。専門部会の検討結果と県教育委員会の考え方が示されましたので、これらについて委員の皆様の御意見をいただきたいと思います。

勝山高校の情報コースに関しては、科目の中には取り入れるという考え方でよろしいでしょうか。普通科に情報系の科目は入れるということでしょうか。

中川委員

専門的な科目までは入れないでおこうと考えています。当初は、情報の科目を2年生で2単位、3年生で2単位、合計4単位入れることを考えておりましたが、専門部会の意見を踏まえまして、専門的な科目まではやりませんが情報の学習内容は取り入れていく、例えば総合的な学習などを利用して学習はさせていこうと考えています。

中川座長

情報の専門の教員を入れるというようなことはないということでしょうか。

- 中川委員 はい。普通科の教員で指導をしていきます。
- 中川座長 普通科の教員で、情報機器やソフトなどが使える程度の教育をするということで、もう少し基本的なところまでは高等学校の段階ではやらないということでしょうか。
- 中川委員 あまりハイレベルなところまではいかないだろうとは思いますが。
- 中川座長 それから、勝山高校を1学年5クラスにする方向性を出していますが、生徒確保の見通しはどうでしょうか。
- 中川委員 現在4クラスですが、中学生の数から言えば、それだけの数はあると考えています。
- 中川座長 現在4クラスで、1クラス増やしても、定員充足に関しては、少なくとも当面は問題ないということでしょうか。
- 中川委員 現在の小学2年生が高校に入学するときくらいには大きく生徒数が減ってまいります。その時にはどうなるかはわかりません。奥越全体でひとつの地域と考えますから、今後どの高校への進学希望が多くなるのかはわかりませんが、生徒の絶対数も少なくなってきました。
- 中川座長 4～5年という期間で考えると、特に定員問題が発生することはないという見通しであるということですね。
- 中川委員 今しばらくは大丈夫です。
- 中川座長 他の委員の方から、御質問、御意見等がございましたらお願いします。
- 橋詰委員 情報コースについてお伺いします。確かに情報というのは、これからのひとつのテーマになってくると思います。坂井地区や嶺南など、他の地域においても、再編や地区ごとの高校の在り方の検討が始まっているというお話がありましたが、他の地区での情報コースの扱いはどうなっているのでしょうか。地域によっては情報コースを新設したいというところもあるのか、それとも今回のような形で収まっているのか、全くこういう話が出ていないのか、お伺いします。
- 高校教育課長 他の地域につきましては、まだ有識者の方々の御意見をお伺いしている段階でございまして、これまでの御意見の中には、情報という話は出てきておりません。
- 橋詰委員 情報にあまり特化させたくないという背景には、大学進学にはあまりメリットがないということがあるのでしょうか。これから大学に全入時代ということになって、大学自体が学生の募集に躍起になっています。それで大学自身がかなり特色を出そうとしています。難関な分野に特色を出すのか、特化したコースを設けるのか、それに適応する学生を募集するという傾向に流れていくと感じております。そういうことを考えますと、個人的には、情報を学んだ生徒の進学にマイナスに働くことはなくなってくるように思いますが、現状はどうでしょうか。
- 高校教育課長 確かに、情報というのは、これからいろいろ注目を浴びてくる学科だとは思

ます。現在、高校教育における情報は、工業系の情報、商業系の情報、一般教科としての情報の3本の柱となっております。工業系や商業系の情報を学んだ子どもたちが大学受験を目指す場合には、基本的にはAO入試などの形で受験しております。普通科系の子どもたちが情報系の大学を受験する場合は、残念ながら、まだ情報で試験を課すという制度にはなっておりません。基本的には、英・数・国・理・社という一般教科の科目で受験に臨んでいます。先ほど申しましたように、工業や商業につきましては、子どもたちが学んだ情報がAO入試のひとつのポイントとなっているわけですが、普通科系につきましては、まだそこまでにはなっていないということです。全国的に見ても、普通科系の学校で情報的な学習にウエイトを置いている学校はあまり見られない状況です。ただ、これから世の中も変わってきますので、変化していくと思います。私どもも、それに応じて対応していきたいと思いますが、現状はそういう形になっております。

中川座長

大学入試という観点からは、なかなか難しい問題があると思いますが、現在、大学での情報系の学生の取り方としては、情報科目に対する学力検査ではなく、普通科系の主要科目に対する学力検査を中心に行っているところがほとんどです。また、AO入試が行われていまして、これは情報系の学科では、工業系や商業系だけではなく、普通科系の人でもそういうことを得意とする人を取っています。大学としては、多様な入学者を入れるという考え方がありますので、我々の大学であれば、情報メディア工学科や知能システム工学科などの情報系の学科では、普通科系からもAO入試で取っているというところがあります。ただ、現在は、やはり主体は通常入試でして、数学や英語などの基礎学力が将来は必要になるということで、そういう基礎学力を重視するような試験形態をとっているということになります。

高等学校で情報系を入れるにしても、いわゆる情報プロパーの教育は多分できないだろうと思われれます。やはりジェネラルな教育というのが基盤にあって、先ほど話が出ていたところでは、そこに4～6コマ程度の情報科目を入れるということでした。その程度の入れ方というのは、中途半端な感じもしています。普通科を基本にしながら情報系科目を少し入れるということですが、大学から見ると、情報をやってきたという感じにはあまりならないのかなという気もしていました。

高校生の段階で情報の基礎に触れておくことは、将来その方向で生きていく生徒の教育にとっては、重要性はあると思いますが、いろいろな面を考えないといけないので、勝山高校の検討部会で出された結論は、現実を踏まえたまともな結論かなというようにも思います。ただ、情報系にチャレンジするという最初の案が結構魅力的であったとも感じています。他に、御意見はございますか。

山田委員

まずクラス数のことですが、大野高校については、再編後も現状の5クラスに近い形になっているということなので問題ないと思いますが、勝山高校は、今のところ4クラスのところを5クラスにするということ、1クラス分の人数を確保ということになれば、地元志向もあって、ほとんどが勝山南高校からの生徒さん、それと最近進学志向がそれなりに高いので、大野東高校からの生徒さんという数で埋まってくるので、そういう形になったときには、学力の格差が今以上に広がってくるという問題があると思います。

また、そのような中で情報コースを新設するということが、学力格差の問題が発生する中で新しいコースの在り方というのは、なかなか難しいものがあると思うのですが、その辺の対処は、どのようにお考えでしょうか。

中川委員

現在でも学力差はございます。そのため、3段階の習熟度別クラスという体制をとっております。御指摘のように、5クラスになりますと、さらに学力差が広がるということは予想しております。そうなったときには、さらに段階を増やした習熟度別クラスを設けることも考えなければならぬだろうとは思っております。

それから、情報コースのことを言われましたが、勝山高校の検討部会の検討結果では無くすという方向にございまして、少し誤解されているように思います。

広部教育長

一昨年来の高等学校教育問題協議会での協議、それから、それを受けての私どもの再編案の中に、勝山高校の情報コースというものを設定してあるわけですが、これはひとつには、先ほどからお話が出ていますように、勝山南高校が統合されてなくなるわけですが、現在、勝山南高校には商業系学科の情報科があるわけです。その受け皿をひとつ用意するというのも、私どもの視点にありました。勝山南高校の生徒全員が総合産業高校に行くということも、生徒の選択の結果でございまして、一応の受け皿を勝山に残しておく必要があるのではないかと議論が根底にあります。

勝山高校の情報コースというのは非常にわかりづらいということ、それから大野側にとってみれば、そうしたものを勝山高校にだけ作るの、少しバランス上おかしいのではないかとといった意見もございまして、非常にわかりづらいという面を専門部会の中でもいろいろ指摘されているわけでございます。この点につきましては、県の教育委員さんともいろいろ御相談する必要がありますし、勝山高校の部会等でも色々議論されていることを踏まえて、これから私どもで協議させていただきたいと考えております。

中川座長

他に御意見はございますか。

平沢委員

勝山の中学生、あるいは親御さんからしますと、やむを得ないと思っております。勝山市内の中学生が通う勝山市内の高校の定員が減る、総数で減るということにはやむを得ない事情があるのだらうと思っております。現在、勝山高校4クラス、勝山南高校3クラス、合わせて7クラスあるわけですが、それが再編されますと5クラスになります。もちろん生徒数の減少ということも踏まえて、ということであろうかと思っておりますが、勝山市内の中学生は勝山市以外の学校に行かないといけないリスクが高まるということですので、その辺には多少不満があるということも事実であります。ただ、これも総合産業高校を作るという県の方針の下で決定されたので、やむを得ないと理解するところであります。

勝山高校の部会でも話がありましたが、これは大野高校も新しい総合産業高校も同じだと思っておりますが、勝山あるいは大野から福井方面に行っているという現状を見まして、地元には是非とも魅力のある学校を作っていただきたいと思っております。今、山田委員から御意見がありましたように、確かに学力差がひとつの学校の中で大きくなるという現実ではありますが、それでも、奥越の学校に行っても、高いレベルの大学にも行ける、近くの国公立にも行ける、専門学校にも行けるという、幅広い、魅力のある学校づくりを目指していただきたいという意見が部会の中でも出ましたので、併せて発言させていただきます。

中川座長

ありがとうございました。他に御意見はありますか。

高田委員

情報が将来必要な能力であるということは間違いないと私は思います。ある職務を実行する上で最低限必要な能力のことをコンテンスといいます、コミュニ

るのですが、奥越も丹南も坂井も嶺南もあまり変わらないなという感じにならないように是非お願いしたいと思います。

広部教育長

高問協においても、常にそういった議論がなされた訳でございます。奥越の場合には、総合ビジネス科のようなものの中に、例えば地域の産業や観光振興について学ぶような学科を設けたらどうかといった議論がなされたわけです。そういったことで今後詰めていく必要があるかと思えます。

それから特に特徴的なものは、福祉部門も既に大野東高校に学科があるものですから、この取扱いにつきましても、福祉という面では、今非常に大きな需要がありますので、更に充実したものにしていってどうかといった議論もなされております。こうしたことを踏まえながら、まとめていきたいと考えています。

中川座長

総合産業高校では、いろいろと地域の特色を出せるであろうと思います。一方、普通科系の高校の魅力や、地域の特色ということになると、どういう考え方をすればよろしいでしょうか。なかなか難しいですね。

広部教育長

普通高校の場合は、勝山につきましても、以前は旧永平寺方面から多くの生徒が勝山高校に学びに来ていた、大野にしても美山方面から来ている、といったグレードの高い状況をなんとか取り戻すにはどうしたらよいかということも視点において議論されたと思えます。

中川座長

多分、地域の特色というのは出しにくいのですが、例えば、教育体系や生徒の扱いなどにおいて、魅力をつくる方法はあるのでしょうか。

中川委員

特に勝山高校に限った魅力ではないとは思いますが、勝山の地区は小・中・高の連携が大変よく、人間性も極めて良好であると感じており、盗難などもありませんし、安心できる学校です。

これは、小・中・高の連続性の中でいつも顔を合わせている生徒が、小学校、中学校、高校と仲間に来ていたということが影響していると思えます。勝山はわりとこじんまりした地域なので、朝起きたら地域の人と挨拶を交わしたりしている中で、そういう人間性が育ってきており、勝山高校では教員の指導が、生徒にずっと染み込んでいるように感じています。永平寺あるいは福井市からでも来てほしい、よい学校だと思っております。

ただ、進学については常に問われるので、高校の授業料が無料化されると、保護者の方々は子どもにより高度な教育を受けさせたい、だから授業料分をストックしておいて大学の授業料にするようになれば、益々進学率が高くなりますから、高校に大学進学を期待してくるであろうと思われれます。そうすると、「これだけ進学させます」ということを言わないと、福井へ流れていってしまう。逆に福井から取り戻すには、そうしないといけない。

どうしたら魅力ある学校になるかということは常に考えていますが、それが自己満足であっては、生徒は来ない。お客とか消費者という用語がありますが、私はそういった人たちの目線から見て魅力のある学校でなければならないと考えております。

中川座長

安心して学べるということは非常に大きな魅力であると思えます。そういうことを基盤にして、やはりアウトカムとか結果も出さなくてはならない、ということだろうと思えます。

橋詰委員 永平寺町から勝山高校には来ておりますか。

中川委員 来ておりますが、数はそんなに多くありません。

橋詰委員 私も永平寺町出身なのですが、私の中学校の時には、随分勝山の方に行ったように思います。福井の方にもたくさん行きましたが、その中でもかなり優秀な生徒が勝山に行ったという記憶があります。勝山の高校には、何か魅力があったのですね。勝山高校は近いということも関係があったと思いますが、かなりの生徒が行ったようです。

勝山高校が、藤島高校や高志高校に負けないような普通科高校としての魅力を作るのなら何かもう一つ必要な気がします。情報コースをあえて特化しないということですが、これからの高校、大学の在り方は、単に学校に行くとかそういうことではなくて、もっと大きな意味で、垣根を越えた中で人間の総合力、魅力を作っていく方向にあると思います。どこの大学へ行ったからどうだという時代は過ぎていきます。その大学は何が魅力なのだろうかとか、全体的にそういうことになっていきます。あえてコース設定を強調しているわけではありませんが、そういう方向にこれからの教育は流れていくだろうと感じています。

大野高校は大野高校の、勝山高校には勝山高校の校風がありますし、新設される高校では、十分地域の特性が生かされるということですので、私は今回の提案に概ね賛成いたしますが、是非、魅力づくりについては、一層吟味していただきたいと思います。

藤井委員 新高校のことについてよろしいでしょうか。先ほど説明をいただきましたが、従来あった学科の授業を他学科でも自由に受けられる選択制を取り入れるということで、これまでは、ひとつの学科の授業しか受けられないけれども、今回の場合は学科を選択していても、自由に選択できるようになるということでしょうか。

渡辺委員 今まで、例えば電気科の生徒でしたら、どの学校でも電気科の科目と普通科の科目を取っていました。新しい総合産業高校には、いろんな学科が集まっている。奥越では、工業、商業、福祉、家庭科が集まっています。集まるメリットは何かというと、例えば家庭科の生徒が電気科へ来て電気のことを少し勉強をする、また、福祉科の生徒が機械科へ行って溶接の勉強をするということで、これから世の中に出てからもプラスになるのではないかと、そういうことで幅広い選択制をとるということです。さらに、大野から要望のあった建設という科目もこの中に残すことがひとつのポイントになっています。

藤井委員 従来の枠にとらわれずに、他学科の授業を選択できるということは良いに違いないけれども、それだけで魅力ある学校づくりと言えるのかなと思います。私も高問協に関わっていましたが、魅力ある学校づくりというのは、そういうレベルのものではないように思います。

学校に入ってくる子どもたちが実社会に出て間に合うかどうか、そこで勉強してどんな学校に行けるのだろうか、ということを考えるわけですが、職業系高校の場合は、知識としては学んだが、実社会ではそれを生かせない生徒も少なからずいるわけであり、やはり、生徒が求めるもののひとつは体験だと思います。やはり、知識に加えて体験があれば、実社会に出たときに非常に役に立つのではないかと思います。

高問協で紹介されていた全国各地の魅力ある学校というのは、やはり体験とい

うものを大胆に取り入れているということがあったように思います。また、この間テレビで、1学年5人までに生徒が減った東京の女子高校が、今では東京で人気ナンバーワンになった事例が紹介されていました。どういう学校かという、生徒たちが、社長、社員というように株式会社の組織をつくって、その中で企画から販売に携わりながらやっていくというタイプの高校でした。授業か、部活動かは定かではありませんが、生徒が選択する中に、農業に関わるもの、観光に関わるもの、いろんなものがありました。店を想定して、体験しながら得たものが実社会で役に立つというものです。その体験も知識の裏づけということではなく、社会に出て実際に間に合う形の体験を取り入れている高校の事例だったような気がします。単に多く授業が選べるということで魅力がある学校と言えるのかどうか、素晴らしいには違いありませんが、地元の一人として、そういうレベルなのかという感じがしてならないのですが、その辺はいかがでしょうか。

渡辺委員

今、生徒は多様化しています。その多様化した生徒に合わせたカリキュラムを作っています。そして、いろんな科目を選択できることに加え、体験することも必要だと思います。選択科目の中でも、実習を入れることもできる、測量で実際に測ることもできる、電気工事もやってみることができる。体験は今の生徒にとって必要なことだと思います。

さらに発展させて、例えば、商業科が中心となって、工業科が作ったものを六間の朝市に出す。地域の方々に喜ばれるとともに、自分自身が大野に貢献しているという気持ちにもなると思います。このように、将来的には、各学科が協力し合うことも考えております。

藤井委員

その場合にも、高校教育の枠を大幅に出ることはできないと思われま。例えば、高問協でお聞きした高校の事例で、いわゆる教える側の人が実際に体験する、例えば、かつてお店をやっていた人が教える、教える専門家が体験することを教えるのではなく、体験した専門の人が教える形の指導方法を取り入れていたものがあったような気がします。実際に体験した側の方が教えることは、子どもに与えるインパクトは大きいと思います。例えば、大野高校でも、ある職業の専門家に来ていただいて、実際に体験している方の話を聞くからこそ、生徒が自分の進路を決める上で、訴える力があるのだと思います。実際に体験した人が教える、教える専門家が体験することを教えるのではない、という教え方ができないのかと思います。それが体験という場合には必要ではないかなと思います。

魅力ある学校をどうしたら作ることができるかを考えると、どうしても、教員の組織、制度そのものを考えないと取り入れられないことがあります。今回の場合は、魅力ある高校づくりをどのレベルまで進めるのか分かりませんが、地区に住む者としては、大幅な、大きな魅力づくりを考えていただけたらありがたいと思います。それは、高問協の魅力ある高校づくりのひとつの方向性でもあったと記憶しています。よろしく申し上げます。

高校教育課長

今の御意見につきましては、私どもも認識しております。工業系や水産系では、「ものづくり人材育成事業」を実施してまいりまして、これは実際に子どもたちが現場に行って、職人さん達の指導の下に旋盤などをやる。また、プロフェッショナルを学校にお呼びして、いろいろな講義を聞くというような形でやっております。これは、各学校においても、これから先、どんどん取り入れていく方向に行くのではないかと考えております。

商業科等につきましては、新しい学習指導要領でも謳っているのですが、地域と密着した教育展開というものがござります。これは地域によって、例えば観光

を主体とするとか、奥越ですと水や自然、また地域の産業とのリンクということがカリキュラムの中に取り込まれていきます。そして、学校と地域とが一体となって町おこしをやっていく中で、子どもたちが地域のことを知り、地域振興について参画し、いろいろな仮想経験することによって社会性を身に付けていくという形に展開していきます。

新しい総合産業高校においては、商業科のカリキュラムの中に取り入れていくという方向で考えており、地域とともに歩む学校づくりを進める中で、独自性、特色が出てくると考えております。

藤井委員

こういう形の中でもやり得るということですね。そうすると、授業を自由に選択できるというよりは、むしろそういうことを全面に出された方が、生徒にとってはインパクトがあると思います。

例えば、勝山の北谷に私立の小学校があります。もちろん基礎教科を学ぶ部分がありますが、全部学年を取り払って、ひとつひとつのプロジェクトが5つも6つもあります。それぞれのプロジェクトの中で体験をしていくという形です。だから、学科や学年の枠をはずして、プロジェクトとしてひとつになって、1年間何かひとつのことをやっていく。例えば、この時間はこのことを体験するというのではなくて、1年間を通じて、組織を作ってみんなで分担しながら、大きなことをやっていくというのは、すごく生徒たちの力になる気がします。そういった形ができるということであれば、大変良いと思います。

中川座長

先ほどの話の中で、農業や観光の話が出ていたのですが、このあたりは新しい総合産業高校では取り組んでいるのでしょうか。

塚田委員

観光に関しましては、総合産業高校の中の総合ビジネス科の中で観光の科目をカリキュラムに取り入れたい構想でございます。

渡辺委員

農業関係についての意見はありましたが、賛成という意見はありませんでした。中学生は職業系よりも普通系志向ということもあり、職業系の総合産業高校として、どうして生き残っていこうかということで、やはり魅力のあるものを集めて学校を作っていきたいと考えています。

農業について、県全体ではどうなっているか、中学生が何を望んでいるか、農業をどう考えているのかは分かりませんが、入試の応募数で人気度は分かると思います。農業についてはあまり高くないと思っております。奥越では、既存の学科を大切にしよう、財産もあるし伝統もある、それらを大切に、何とか良いものができないものかという話になっています。

中川座長

選択制を取り入れるとは言っても、各学科の取組みが中心なので、そんなにたくさん取り込めるわけではないですね。

渡辺委員

何単位か、何コマかということになると思います。現在、どの職業系高校においても、自学科選択と普通科選択は4単位から5単位くらいはやっています。さらにもう少し増やしていこうという思いはありますが、単位数についてはまだ詰めておりません。これは、総合選択制の単位数を広くすればするほど、生徒のニーズに応えることにはなりますが、ひとつひとつの学科の専門性が薄れることになるので、専門の先生と調整しながら、ベストな単位数を決めていきたいと思っております。

中川座長 魅力を出すとか、地域特性を出すとかという観点から御意見をいただければと思います。大野高校は普通科一本ですけれども、就職する生徒さんもおられるのですね。

西川委員 15、6年前までは大野高校に商業科がありまして、毎年80名ぐらいは就職者があったと思います。その後は減っていきまして、近年は5人前後で、今年は4人です。現在はほぼ進学しているため、就職者用の講座というのは考えておりません。

中川座長 勝山高校はいかがですか。

中川委員 今年の就職希望者は5名です。3名は決まりまして、残り2名は進学に変更になりました。

中川座長 職業系の高校は、大部分が就職されるのですか。

渡辺委員 いいえ。就職者は6割で、4割は専門学校、短大、大学への進学者です。

橋詰委員 先ほどお話がありましたが、学力格差の問題がだんだん広がってきており、これからさらに広がる傾向とのことです。それから、学力低下は全国的な問題ですが、大学の工学系統の先生から、新入学生にもう一度高校の化学と物理を教えなといけないということをよく聞きます。

これからの日本社会、福井県のことを考えますと、中学校、高校の教育の在り方は非常に大事だと思います。だからこそ、今回の新しい高校づくりに注目しているわけです。子どもの学力は、福井県は全国的に上位にあり、それが高校、大学にもおそらくは通じていくと感じています。その人たちが地域に戻って頑張っていたら、その地域の力になっていくわけです。

先ほどから、地域にこだわったことを話していますが、ゆくゆくは、この地域で学んだ学生が、地域にできるだけ寄与するというか、将来の産業人として根付いていく方法をこのときから考えていかないといけないと思います。東京や関西の大学へ行って、戻ってくればよいのですが、大半は戻らないのが現状です。そうすると中学、高校で一生懸命学んだのに、この地域に寄与できないとなると、極めて虚しいというか、残念な教育になってくるのではと思います。

そうした意味で、地域の特色というものを高校の段階から学ぶ、こういう産業がある、こんな特色があるということを高校生の皆さんによく認識していただく。進学もさることながら、ここは素晴らしい土地なんだ、ここに生まれたからには、将来ここに戻って何かの役に立ちたいという気風を芽生えさせて欲しいと思います。

最近、学力の方かなり力点が置かれていることについては、いささか残念だし、これから高校の授業料が無料化され、家計の負担が減り、誰でも大学に行けるような時代になった時にこそ、この地域での学校づくりについては、もう一步、将来を考えて地域ということでの視点で切り込んでいただければと思います。

中川座長 橋詰先生から地域の将来を含めて考えていただきたいというお話がありました。最近では、高等学校の段階でも、職業人教育とか職業人意識といったものが重要になってきていると思います。多分、教育課程の中にもそういうものを組み込む状況になってきていると思っています。

大学は、まだ遅れていきまして、中教審の分科会で議論が残っています。高等学

校までの議論は、国のレベルでは確か終わっていて、職業人教育というものを教育課程の中に組み入れることによって、高校生が自分の将来像をしっかりと見据えて学習に励み、そのことによって学力を伸ばしていくという戦略だと思います。大学まではいろんなところに行くにしても、以外にあまり知られていないのですが福井にも卒業生が働く場所はいろいろあります。そういうところを高等学校の教育の段階で、うまく組み込んで行けるとよいと思います。例えば、企業の人を招いて特別講義を実施するなど、将来、福井に戻ってくるような体制も高等学校レベルの教育課程の中で組み込んでいくと良いのではないかと思います。これはもう高校の教育課程の中に、既に組み込まれているのですか。

中川委員 教育課程の中ではないのですが、学校行事としては、社会人の方に来ていただき講話を行っております。仕事の厳しさや面白さを教えていただく、いわゆるキャリア教育をやっております。生徒の感想は、本当にためになる、仕事、社会のことが少しは分かるようになった、学校の勉強以外のことがわかったというようなことです。そういう教育はしていますが、ただ、地元に戻ってくれとは言っていないのが現実です。

中川座長 自主的に戻ってくるということでしょうか。

中川委員 「実は福井の技」という冊子もありますので、活用していきたいと思っています。生徒には、その福井の技の本人になっていただければと思っています。

中川座長 インターンシップなどは、やっているのでしょうか

中川委員 普通科では、そこまではやっておりません。

広部教育長 インターンシップは計画的にやっております。それから全国的にキャリア教育は重視されておまして、高等学校を卒業して就職する子どもの、3年以内に離職する率は5割、半分が離職してしまう。本県においては40%強で、全国よりは少ないですが、3年以内に離職するという大きな課題として捉えまして、職業系教育の見直しについても進めております。

中川座長 それでは、御意見も出尽くしたようなので、審議を終えたいと思います。今後の予定ですが、専門部会の報告と、これまで委員の皆様からいただいた御意見を元に、この会議の報告書を作成したいと思います。

報告書を作成次第、委員の皆様を送りますので、修正意見等があれば事務局まで御連絡いただきたいと思います。

皆さんの御意見を踏まえ、報告案の修正を行い、事前に皆様に御確認いただいた上で、私から県教育委員会に正式に報告させていただきたいと思いますが、そういう方針でよろしいでしょうか。

《「異議なし」の声》

中川座長 それでは、そのようにさせていただきます。本日は熱心に御議論いただき、誠にありがとうございました。御議論の中でいろんな問題でも指摘されてきたと思います。せつかく高等学校の再編成を行うわけですから、やはり奥越地区の魅力、地域の特色というものを発揮できるような体制にしていく必要がある。ただ、大野高校、勝山高校、新しい総合産業高校の構想を、形の上で魅力とか特色を議論

するのではなくて、教育の中身で魅力や特色を出す工夫が必要だと思います。

先ほど、勝山高校からも魅力の具体例が挙げられましたが、各地域で小・中・高の中等教育段階での連携を進めていくとか、奥越地区の人々の人間性を教育の中に反映させる。そして何よりも、生徒が安心して学業に励む環境づくりが非常に重要だと思います。

それから、各高校5クラス編成になりますので、その場合に生徒の学力格差の問題とかも出てくると思いますが、これも様々な工夫をして克服していく。学力格差が何から出てくるかということも高等学校として考えていく必要があると思います。大学でも、そういう問題が深刻になっておりまして、実は大学の1年次、2年次の段階で、それに対応する様々な教育課程を作ってきています。それを実際に実践していきますと、入学時点で学力に問題にあった学生が、2年次の終わりぐらいには、トップクラスとは言えないが、全学生の間よりも上にいるという統計結果も出ています。ですから、学力格差、学力低下とは言いながら、やはり教育上の工夫も重要だと思います。

前回非常に重要な部分になっていました、勝山高校の情報コースに関してですが、情報コースに関する期待というのは一般的には非常に高くあると思っています。しかし、現実的な問題をいろいろ考えますと、今、情報コースを勝山高校に作るのは、いろんな意味で危険性が高すぎる。教育効果の上でも問題があるということで、情報教育は高校レベルで当然取り入れていくでしょうけれども、正規のコースとしては作らない方向でまとまったと思っています。

新しい総合産業高校ですが、大幅に選択制を取り入れて、生徒の学べる範囲を拡大するといった案が出されています。職業系高校においても進学希望があり、生徒が途中で自分の進路を変えるということは当然ありうるのですが、高校を卒業して職業に就くのが基本だろうと思われまます。その意味で、職業系高校の教育が、ある意味では完成教育ということで、社会に出て自分の分野に責任が持てるような、そういう生徒を輩出することが非常に重要なことだと思います。いろんな学科を作るわけですので、選択制を生かして教育の幅を広げること、専門分野の教育というもので社会の信頼を勝ち取って、卒業生が地元で働けるような環境を作っていくことが重要なのではないかと思います。

その他、様々な御意見をいただきましたが、事務局で議事録をまとめていただきまして、それを元に報告書の原案を作成していただこうと思います。今日は、本当にありがとうございました。進行を事務局にお返しします。

○閉 会

教育政策課長

どうもありがとうございました。今、座長からお話ありがとうございましたとおり、御提案いただきました内容につきまして、報告書として取りまとめさせていただきたいと思いますので、よろしく御協力をお願いいたします。

また、本日の議事録につきましては、事務局で整理したものを教育政策課のホームページに掲載したいと考えておりますので、よろしくをお願いいたします。

報告書につきましては、教育委員会にも諮ってまいりたいと思いますので、よろしくをお願いいたします。

それでは、第2回会議はこれで閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。

- 以 上 -